

自発性、創造性を引き出す施設ボランティア活動の開発

石川 昇
(国立科学博物館)

【要旨】

社会教育施設におけるボランティア活動は、職員とともに、施設をより地域に開かれた地域のニーズに適した存在にしていくことをはじめとする、さまざまな意義を有する活動である。ボランティアはそのような意義のある活動を自発的かつ創造的に行うことが望ましい。しかし、社会教育施設においては、ボランティアが自発性や創造性を発揮しにくい制約や環境があり、その問題点を考察する。そして、国立科学博物館における自発性、創造性を引き出すボランティア活動の開発の試みを報告する。

1. 社会教育施設におけるボランティア導入の意義

社会教育施設におけるボランティア活動は、図書館、博物館、公民館、婦人教育会館、青年の家、少年自然の家などの施設で導入されている。その意義について考察する前に、社会教育施設ボランティアにおける活動と学習の関係について考察する。

社会教育施設におけるボランティア制度は、社会のために自分を提供する活動というよりも、「ボランティア」というメニューによる学習活動あるいは普及啓発を兼ねた利用促進活動という学習者の施設利用の一形態と位置づけて導入している施設がある。確かに、社会教育施設におけるボランティア活動は活動者の学習と不可分の関係にあるが、ボランティアイコール学習者として、学習が<主>でボランティアは<従>という考え方には賛成しかねる。そのような考え方はボランティアの概念を歪め、「ボランティア」としての社会貢献活動を希望する者の意志を傷つけるもので、誤解を避けるためにも「ボランティア」という言葉を使用しない方がよい。

その理由は、「ボランティア」の規定については、一般に自発性（主体性）、公共性（公益性、利他性）、無償性（非営利性）という3原則や、それに創造性（先駆性、開発性）を加えた4原則があると言われるが⁽¹⁾、学習が<主>で活動は<従>というとらえ方では学習に対する自発性は豊かでも、社会や他者のために自分を役立てたいという、公共的あるいは利他的な活動への主体性が欠落ないし希薄だからである。ボランティア活動には、社会参加、社会への還元、自己の社会における関係性の再確認または回復、あるいは他者との連帯、他者とのコミュニケーションなど、自分と外部との関係について再構築あるいは新たな構築をしたいという動機がある。また、ボランティア活動を学習活動ととらえる場合、学習活動としての範囲がどこまでかという問題が起こる一方、学習の機会を限られた人々のみ与えることも問題で、希望が多い場合はボランティア活動の期間を限定する必要が生じるし、希望があまりに少ない場合は事業として魅力がない点で問題である。

本稿においては、社会教育施設におけるボランティア活動を学習のためのボランティア

活動ではなく、学習者を支援するボランティア活動を行いながら結果的に学習につながる活動として論じることとする。

(1) ボランティアとしての意義

社会教育施設において学習者を支援するボランティア活動は、活動のための学習を行い、学習を活動に活かしながら、活動において質問を受けたり疑問が起こったり、あるいは関係分野の知識が必要になったりして学習が触発され、再び学習を行ったり、職員ばかりか時には利用者からも教えられる。また、指導方法やコミュニケーションの方法を学んだり、対象となる人間、とくに青少年や障害者についての学習も必要になる。このように、社会教育施設におけるボランティア活動は学習との循環性がある。活動の遂行、深化には学習が不可欠であり、学習を深めることがボランティア活動の価値と幅を深めることになる。

また、ボランティア活動は、活動の対象が人間であれば、その人間を理解し、共感して、自分の知識、労力、時間、財を差し出すという精神的な動きを伴う行為で、単なる労力の提供ではない。助ける者と助けられる者の関係は融合する(2)。社会教育施設ボランティアも教える者と教えられる者が融合し、新たな知識の獲得や発見に共に喜んだり、調べたりということが起こる。人を相手にする活動ではない場合も、自分の活動が他の人々に与える効果を前提に活動しており、そのような人々との心理的連帯感が活動の重要なエネルギーになっている。そういう点でボランティア活動は人との出会いであり、それまでの日常とは別の世界との出会いである。さらに、そのような世界で活動し自己を演じる新たな自分との出会いであり、広い意味での自己啓発でもある。

(2) 社会教育施設としての意義

日本における多くの社会教育施設は長い間施設職員の視点、認識、発想による、施設職員による運営を行ってきた。そして、80年代に生涯学習の理念が社会教育の現場に入ると、学習者の主体性を強く意識する方向に向かった。しかし、それまで施設職員が自分たちだけで考えて正しいと思ってやってきたものを、住民という学習者の視点、認識を知り、そのニーズに応えよ、あるいはニーズを発掘せよ、と言われても簡単に転換できるものではない。生涯学習の理念を掲げて開設した施設は、開設当初はそのときにできる範囲の住民重視の配慮を見せるが、その後新たな方策は導入されずに沈滞化するが多い。

学習者の視点やニーズを認識してよりよい施設運営をするためには、学習者や地域住民のニーズを広く聞いて施設がどうあるべきか考える必要があるが、もっと効果的なのは、施設を理解し、学習し、施設に協力したいというボランティアの協力を得ることである。ボランティアとともに、施設のあり方、導線をはじめとする利用のされ方、さまざまな事業などを見直し、再構築することが大切だ。それも止まることなく続けることが大切だ。

社会教育施設はボランティア制度を導入することで、多様な視点、発想、能力、技能という「人材」を得ることができ、それまで行うことができなかつたさまざまな活動を行うことができるようになって、施設の活動、サービスが拡充する。そして、利用者身近で親しみやすい施設になる。

また、効果的な場所にポスターを掲示してくれたり、口コミの効果はたいへん大きい。さらにはボランティアが市民を施設に案内したりと、一人のボランティアは数名、数十名の新たな施設利用者を生み出す可能性がある。

(3) 施設利用者としての意義

ボランティアが生き生きと活動している施設は、明るく活気ある雰囲気が漂っている。博物館で、ボランティアが展示を前にしてメモを取ったり、ボランティア同士で知識の交換をしているだけでも、それを見た見学者は展示の意味や価値を想像し、博物館のイメージが向上する。もちろん、ボランティア活動が施設の活動を拡充させている。さらに、施設利用者は、直接、ボランティアから親切に、熱意をもっていろいろなことを教えてもらったり、ニーズに合った心のこもったサービスを提供してもらえる。さらには、学習の楽しさ、学習した成果を他者に伝える大切さを感じることもできるだろう。

また、施設に行かなくても、施設で活動するボランティアから学習情報を中心とする施設に関するさまざまな情報を得る場合もある。それは、ボランティアが利用者の学習テーマやレベル、好みを知っている際は、極めて有益な情報となる。

(4) 地域としての意義

ボランティアの活動により、社会教育施設がより地域のニーズに適した活動を行う住民に身近な存在になることで、学ぶ人が増え、地域の学びあい教えあう学習活動が活発になる。施設は教え合い学び合いの拠点、社会のコミュニケーションセンターとなる。

社会はますます人が人に会わずに暮らせるようになり、人々の結びつきは希薄になっている。そのようななかで、ボランティアが施設で活動し、コミュニケーションの機能を果たす意義は大きい。

また、青少年に対する意義は大きい。現代の青少年は日常、成人と接触するのは、親、教員、塾の講師など自分を評価する人間ばかりだが、施設で、自分の興味関心を引き出し、発見や考える楽しさを味わわせてくれ、自分の可能性を引き出してくれる成人と接触することは大変意義深い。さらに、ボランティアが活動する施設は学校の総合学習における利用にもさまざまな可能性がある。

2 社会教育施設ボランティアの性格と問題点

(1) 施設ボランティアに求められること

ボランティアは施設利用者から施設側のスタッフとしての対応を求められる。少なくとも施設の何がどこにあるか、どんな事業を行っているかなどについては、ボランティアだからわかりませんという対応は、通用しない。施設でボランティアとして活動するためには、施設を熟知し、施設の方針に則り、定められた範囲内で活動することが求められる。そのように、施設ボランティアとして活動するためには施設の制約を受けることになる。

しかし、それはボランティアが施設から命令されたり服従する関係になるわけではない。ボランティアになろうとする人は、その施設の活動及び活動分野に興味関心があり、施設の活動に賛同してボランティアとして協力するのだから、施設がどうあるべきかという理想を抱いたり、施設に問題点を感じたりするのは当然だ。施設によかれと思う意見や提案はどんどん出すべきだ。ただ、気をつけるべきことは、誰もが口に出している自明なことや絵に描いた餅のようなことを声高に言うことは慎むべきだし、理想に対して自分がボランティアとして何ができるか考えることが大切だ。

また、社会教育施設がサービス施設であるという認識も必要である。利用者に対しては

丁寧に、相手の立場を尊重して対応し、相手のニーズを把握して対応する。そして、不明なこと、不確かなことは言わないようにする。同時に、教育機関としての意識を持ち、とくに青少年に対しては単に聞かれたことを応えたり決められたことを行うだけでなく、その青少年の成長につながるような対応をすることが重要である。

謙虚さも大切だ。「してやっている」ではなく「させていただいている」という意識で利用者と接することが、効果的な実りあるコミュニケーションを生む。また、謙虚さは施設職員にも必要で、ボランティアに対し「させてやっている」ではなく「していただいている」という意識が大切である。両者がそのような認識を持つことで、親しいながらも緊張感のある節度ある関係を築くことができる。

(2) 施設ボランティア活動希望者の傾向

社会教育施設ボランティアの特徴として、当然のことながら、ボランティアをしながら学習をしたいという希望を持つ人がいるが、あくまでも第一の目的はボランティア活動であり、学習は活動に付随して得られるものと認識すべきだ。そうでないと、自分の学習にとってプラスにならないと思うと活動がいかげんになったり、講座での活動で受講者を差し置いて質問をしたりする場合がある。さらに、公務員を志望したり当該社会教育施設職員になりたい、アルバイトでもいいから入りたいので、とりあえずボランティアになりたいという場合もある。ボランティア活動への意志があり、活動しながら有利な情報が得られればありがたいという程度の希望であるならば構わないが、第一義的に金銭を得る労働をしたいという場合はボランティアの趣旨を話した上で御遠慮いただくべきだろう。

また、施設におけるボランティア活動はすでにボランティア活動のルールが敷かれているところにくるため、受け身の人が多い。社会教育施設の多くは役所の機関であるため、明確な目的をもってバリバリ活動したい人は来ないということもあるのかもしれない。ボランティア活動に責任があるとは思わず安易な姿勢の人も多いし、やりがいや自己実現など活動による効果をすぐ期待している場合も見受けられる。つまり、ボランティアとしての原則でいわれる開発性や創造性を発揮しようとする人はあまり見られない。一方、この件に関しては、次の(3)で述べるように歓迎する施設も多くはない。

(3) 施設におけるボランティア活動のとらえ方

施設がいくらボランティアを導入しようとしても、人々の参加がなければボランティア制度は成立しない。人々に参加してもらうためには「ボランティア」としての魅力が必要であり、ボランティアを単に「社会奉仕」という労力の提供にとらえる発想からは魅力的なボランティア像を描くことはできない。多くの人々に活動に参加してもらうためには、やりがいがあり、学習につながる活動を用意できるかが問われるのである。

また、ボランティアを施設をともに運営する協力者にとらえず、あくまで外部の人間としてとらえれば、ボランティアは施設内に入ってしまった外部者になる。そして、ボランティアに対して活動の場を提供してやっているという意識になる。そのことがボランティアに対して高圧的な態度になり、上下関係にあるような立場になる。そうでなくても、施設は組織としての論理があり、なるべく外から干渉されたくない、不備を指摘されたくないという組織を守る本性がある。ボランティアが施設の不備を言おうものなら、職員はボランティアの教育が悪いとボランティアの担当者に怒る。ボランティアは限定したことを

やってくれるだけか、学習だけしていればいい、施設の経営には口出しするなという考え方になり、ボランティアの主体性、創造性、開発性などはもつてのほかで、そんなことは施設ボランティアでは許されない、と考える。

そのような施設職員は意識の変化が必要だ。ボランティアに生涯学習の場を提供する、社会貢献の場を提供するというだけではなく、ボランティアは施設を職員とともに作っていく協力者であるという認識の転換が求められる。社会教育施設は施設職員だけで作るのではなく、ボランティアをはじめとする地域住民とともに作る事が、施設を地域に開かれた地域住民のニーズに適合した、そして不断に住民のニーズを開発するエネルギーをもつ施設に変えていくのである。ボランティアが自発的に生き生きと創造性を発揮した活動をしてこそ、さまざまな貴重なアイデアが生まれる。そして、社会教育施設を利用者が親しめ、利用しやすく、利用したくなる施設にしていく。

3 国立科学博物館における自発性、創造性を引き出すボランティア活動の試み

(1) 国立科学博物館における教育ボランティア制度の概要

国立科学博物館では昭和61(1986)年1月に教育ボランティア制度を導入し、前年に開設した参加体験型展示「たんけん館」において、青少年に展示の体験や観察の方法を教え、自然や科学に対する興味関心を引き出す助言を行うという活動をはじめた。(3)

導入当初8名で始めた教育ボランティア制度は、「たんけん館」における活動を中心に登録者数を増やしながら年毎に活動分野を拡大するとともに、見学者に対する案内・情報提供・見学相談を行う「案内所」、「読書コーナー」の案内・受付、映像や体験展示の運用など、平成6(1994)年には毎日8種類の活動をボランティアが担当するようになった。また、館発行の月刊誌を朗読・録音して視覚障害者にテープを貸し出したり、教育ボランティアの新聞を1,2か月に1度発行するなどのグループ活動も行われるようになった。

活動の実施方法は、教育ボランティアが各自活動する曜日を決め、担当職員が各ボランティアの希望する活動分野のなかで配置を指定して、月毎に活動プログラムを編成して行っている。同じ曜日の教育ボランティアはグループになって活動や自然科学の情報の交換、休暇の際の交替などさまざまに分担、協力しあっている。

教育ボランティアと館との情報交換・連絡調整のために、曜日毎のボランティア代表、過去に表彰されたベテランのボランティアと関係職員で「教育ボランティア連絡会」を設け、年5,6回実施している。

平成7(1995)年以降、教育ボランティアの登録者数は215-230名、年間のべ活動者数は9000名を越え、一日平均活動者数は約30人である。平成12年度は登録者は223名(平均年齢56.4才)で、男性は81名(同62.3才)、女性は142名(同53.0才)、主婦が105名(47%)で一番多く、次が仕事を退職された男性で55名(28%)である。平成6年度以降は、午前9時30分から午後4時30分までの活動という条件で募集していることもあり、学生や勤労者は参加しにくい面がある一方、休みや入れ替わりが少なく安定しているという面がある。また、都道府県別では東京都が半数、残りが関東近県である。

平成8(1996)年1月には教育ボランティア制度創設10周年の記念行事として、記念式典とパーティーを実施し、記念誌の刊行(4)とともに、全国博物館ボランティア研究協議会

を開催した。この協議会は隔年度毎に3回実施された(5)。

(2) ボランティアの自発性、創造性を引き出す試み

活動分野が増えた日常の活動は外部の博物館の方からは充実しているという評価を受けるようになったが、担当者の自己評価は忸怩たるものがあった。それは、もっとボランティアが生き生きと楽しそうに活動してよいのではないか、もっとボランティアの知識、能力、エネルギーを発揮できる活動を開発できるのではないか、自分の仕事はボランティアの監督ではなく、ボランティアとともに施設について考え、ボランティアがしたいと思い、できることを実現しながら施設の活性化に役立つことではないか、という疑問だった。

そして、平成9(1997)年の教育ボランティア連絡会において、教育ボランティアから新しい活動や活動のための学習について積極的な意見、提案を求めるとともに、職員側でも検討を行った。

同年、それまで教育ボランティアが活動していなかった特別展への協力を得ることとし、特別展「ふしぎ大陸南極展」において、教育ボランティア活動として体験型展示の案内・説明を行った。これは特別展における初めてのボランティア活動で、教育ボランティアも新鮮な活動に気分をリフレッシュさせ、新たな学習をして活動した。以後、教育ボランティアの活動として相応しいものがある場合に特別展会場での活動を行っている。

(3) 自発的な相互学習の活発化

教育ボランティアからの変化はまず相互学習の面で起こった。教育ボランティアが新たに自発的な相互研修会をはじめたのである。平成10(1998)年度から月に1,2度定期的に行う研修として「手話講習会」「ラテン語学習会」が生まれた。以前から有志で行われていた自然観察会、博物館見学会はさらに活発になった。同年の教育ボランティアが活動した特別展「大恐竜展」の開催前には、館で行う研修のほかにも教育ボランティアによる自主的な研修も実施された。

また、教育ボランティアの有志が車椅子に乗って館内歩行調査を行い、施設や展示の改善すべき箇所をレポートするとともに、車椅子利用者へのチラシを作成し、玄関の総合案内所で配付するようになった。さらに、そのグループが中心になって、教育ボランティア研修で車椅子の扱い方、視覚障害者の誘導の仕方の実習を行うなどして、障害者に対する案内・誘導について学習した。手話学習会の活動とともに、一部教育ボランティアの博物館のバリアフリーについての意識はしだいに多くの教育ボランティアに広がっていった。

(4) ガイドツアー(展示案内)の開始

平成10(1998)年秋には2種類の新しい活動を導入した。これらは以前から一部の教育ボランティアから活動の希望が出ていたもので、教育ボランティア連絡会でその方法を検討し、共通理解を図りながら慎重に実現を図った。

その一つは、希望する見学者に展示室を案内する「ガイドツアー」である。館が選んだ見どころ25カ所から自分で案内したい展示をピックアップして1時間で館内3つの展示館を回るハイライトコースと、教育ボランティアが特定のテーマでシナリオを作って回るテーマコースがある。教育ボランティアには、ガイドツアーは見学者への解説・説明ではなく楽しく有意義な見学のための案内であり、謙虚な姿勢で見学者とコミュニケーションす

ることを求めている。活動を希望するボランティアは、どの展示を組み合わせて自分なりのコースを組み立てるか腐心し、熱心に学び、さらに互いに学習会を持ったり、互いのツアーに参加するなどして準備をした。担当者としては、それまでのボランティア活動にはなかった、一般向けの案内・説明である点とプレゼンテーションの能力が問われる点で大変心配し、活動を行うにあたっては職員のチェックを受けてもらうこととした。しかし、これまでお叱りや知識の不備の指摘などはなく、参加した見学者からは時間延長を希望されたり、励まされたり、礼状をいただくなど大変好評である。

(5) 観察キットの製作とその活用による指導の開始

二つめは観察キットの製作・整備とその活用による青少年への指導助言である。観察キットは参加体験型展示を補うものとして、従来から職員が製作していたテーマ毎の箱に標本その他の資料をセットしたものであるが、平成11(1999)年4月の新館開館をめざし多くのキットを再生あるいは新規製作することもあり、教育ボランティアの活動に取り入れることにした。「たね」「シダ」「森のあそび」「たまご」「変形菌」「砂」「古生物」など、動物、植物、地学の20数種類のキット毎に班を作り、テーマの面白さをいかに青少年に伝えるか考えながら、職員と相談しながら標本収集、資料・教材の製作、指導マニュアルの作成などを行っている。とくに、教材は青少年の興味を引き出すことに留意し、手で触って楽しむことのできるいわゆる「ハンズ・オン」を含めた教材を開発している。さらに、担当班以外の教育ボランティアも観察キットを活用できるように、教育ボランティア研修でそれぞれの担当ボランティアが説明者となって、各観察キットの趣旨、内容、活用法について共通理解を図った。

観察キットは適宜興味のある青少年への指導に使うほか、週毎のテーマで毎日実施している「かはく・たんけん教室」や夏休みのイベントなどで活用している。「シダ」のシダパズル、「足あと」の足あとスタンプとそのシート、「森のあそび」のどんぐりのおもちゃなど、創意工夫した教材は子どもたちに好評である。それぞれのテーマについてどうすれば青少年の興味関心を引き出せるか考え話し合いながら、収集したり製作したりして、それを実際に活用して効果を見る、という一連の完結した活動はボランティアにとって大変やりがいのある活動であるようだ。また、砂の観察キットにおいて、教育ボランティアに旅行先での海岸の砂の収集を呼びかけたところ、北海道から沖縄まで約70カ所の砂が集められ、担当職員が感動した、という逸話もある。

(6) その他の分野での自発性、創造性の発揮

平成12(2000)年のこどもの日には教育ボランティアが発案し、ボランティアの有志とボランティア担当職員が実行委員会を作って準備をして、「教育ボランティアによるこどもの日特別企画 科学と遊ぼう」という観察や工作を行うイベントを実施する。

そのほか、教育ボランティアの手話学習会が「見学者支援研究会」に発展して見学者のバリアフリーについて研究、開発し、展示の音声解説や解説付き映像展示の聴覚障害者や外国人に対する文字表現化を実現しようとしている。

また、平成12(2000)年3月末にはボランティアと職員との懇談会(約140人規模のパーティー)を教育ボランティアの有志と担当職員で実行委員会を作って実施した。参加費1000円の手作りのパーティーであったが、教育ボランティアが料理を作ったり、ケーキを焼

いて持ってきたり、あるいは家で飲まないアルコールを持ってきたりして、大変ユニークで楽しい会となった。このように、教育ボランティアのエネルギーは活動の部分にとどまらず、さまざまな部分で発揮されるようになっている。

(7) まとめ

教育ボランティアの自発性、創造性を引き出す努力はまだ道半ばではあるが、ここでどのような変化が起こっているかまとめておきたい。

まず、博物館活動が拡充した。見学者に対するガイドツアーや特別展の際の案内・説明、青少年に対する観察キットの整備とその活用による指導、こどもの日のイベントの実施、障害者や日本語のできない方に対するバリアの軽減などが実現または準備されている。教育ボランティアはそのような活動を行うために、来館者の潜在するニーズを調査し、活動を企画し、検討・調整し、学習し、準備する。そして、その過程はボランティアを元気にし、結びつきを強くし、士気を高めた。館で醸成した自由で柔軟な雰囲気自発性と創造性を刺激した。そして、いい提案をすると実施に移されるとわかると、さまざまなボランティアがいろいろな提案をはじめようになった。職員にとっては、博物館の向上、発展のために、対案のない理想論を述べるのではなく、自らができることを身をもって実現しようとする教育ボランティアの存在を見直し、協力関係はさらに良好になった。担当職員にとっては、ボランティアとの調整、館への提案、関係各課との調整、実現のための各種準備など、多忙を極めるようになったが、他の職員の教育ボランティアに対する印象が良くなり、やりやすくなっている。

しかし、ボランティアの博物館や社会への貢献の方法、ボランティア自身の自己啓発の方法などには決められた方式も解答もない。方法によっては、さまざまな分野においてもっと多くの可能性があるのではないだろうか。また、当館の教育ボランティアの場合、ボランティア活動への積極性、熱意はあるが、活動をより充実させるための運営に関心を示し提案を出す人はあまりいない。担当者のあり方や制度上の問題点の検討も含めて今後の課題と考えている。

大切なことは提案から実施までの過程で、教育ボランティアや職員の発想や提案を適切に評価し、望ましい事柄については担当部署と検討、調整して、館とボランティアが協力して新しい館の事業として育てていくことである。そして、実施にあたっては、実施の趣旨・方法を明確にして、教育ボランティア、職員へ理解を図り、教育ボランティアの士気を高めながら、活動者の資質を向上させていくことが大切である。そのさい、こうでなければならぬという発想は害悪で、常に現在進行形で考えることが大切だ。

* 3については平成12(2000)年4月末現在で報告させていただいた。

註

- 1 『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』(生涯学習審議会平成4年7月29日答申)は4原則
- 2 『ボランティア - もうひとつの情報社会 -』金子郁容著 岩波書店 1992 (岩波新書) p5-7 / 『ニューヨークのボランティア』黒川育子著 朝日新聞社 1995 p14
- 3 国立科学博物館編刊『教育ボランティア制度10年のあゆみ』1992
- 4 同上
- 5 国立科学博物館編刊『全国博物館ボランティア研究協議会概要 第1,2回』1996-1997